

読売新聞 1998.12.5

「インタビュー」

タイトル ひっそり「九州派」を通す

サブタイトル 漁村や山村にこそ反応がある

このところ、長崎県平戸市の漁村や福岡県宝珠山村など辺鄙な場所で発表してきた元九州派のベテランが約 10 年ぶりに福岡市で個展を開いている。「もう死んだかと思われているかもしれないから、画廊から誘ってもらったのを機に久しぶりに都会で」ということだそうだ。海の砂や煤、漆喰などで描いた静謐なモノクロームの絵画を通して、九州派の精神を粘り強く実践しているらしい画家の現在をかいま見ることができる。

なぜ、漁村や山村を選んで発表するのですか。

「今さら、ちゃんとした会場で発表することもなかろうと。地方分権などと言いながら、結局は中央思考ですよ。みんな都会を目指している。ぼくは消費社会の中に身を置きたくないというか、ひっそりと自分を追求したいと思っている。平戸の根獅子地区の場合、市の中心部から 24 キロも離れているんです。初めて絵を見るというような人ばかりなんです、逆にこちらは真剣勝負ですよ」

どんな風に反応が違うのですか。

「都会なら反応を計算できるし、計算する自分のいやらしさみたいなものも感じてしまう。誘われて現地を見て、湧いてきたイメージを絵にするのですが、ぼくの絵は抽象でしょう。何を描いているのかわかるはずがないのですが、『わかる』と言われるのです。『これは平戸だ』と。言葉にはなりませんよ。でも、通じていることがわかる。都会で絵が売れたとか、評判がよかったというより、もっと真実の喜びがある」

「根獅子は四日間の会期中、地元の人がテントを張って、ぼくのために炊き出しをしてくれた。ぼくが絵を教えている人の中に九響のメンバーが五人いて、公民館で室内楽をやってくれました。クラシックなんて縁のない人たちが相手ですが、唱歌や童謡みたいなものはやって欲しくない。で、ドビュッシーを昼夜二回演奏してくれたんです。昼来てたおじいさんが夜は最前列で聴いていました。

『難しいのはわからないだろうから、わかりやすいものを』と考えるのは間違い

です」

内陸部で生まれ育った尾花さんがここ十年ほど海をテーマに描いている。

「筑後川のシリーズを長く続けていて、新しい世界を作りたかった。最初は瀬戸内海に行ったんです。屋島の高台から眺めているうちに、歴史とか人間の営みとか、ぼくの育った筑後の内陸部の様子と通じ合うものがあると思った。国東半島をはじめ大分の海はくまなく回りました」

海岸の砂をふるいにかけて、フライパンで焼いて殺菌したのを、ボンドでベニヤ板に接着して下地を作る。黒の部分には国東の砂を使い、油煙(煤)を塗っている。白の部分は平戸の砂の上に漆喰だ。画材を買えなくて、コールタールなど身近にある安価な素材を活用したという九州派時代を思い出させる話だ。

「漆喰は一俵いくらで安上がりだし、質感がいい。砂の配合でいろんな白を出せる。何か材料にならんかと探す習性はたしかに九州派時代からのものでしょうね」

目立ちたがり屋の印象が強く、中央の権威にかみつきながら、どこかで中央に流し目を送っていた観のある九州派の中で、尾花さんは独特の位置を占めていたように見える。

「九州派のエネルギーは外に向かっていましたが、ぼくの場合、自分のための九州派だった。自分を変えるために九州派が必要だった。人がどう思おうが、どう見ようが、無駄な労力を惜しまずに、やりたいことをやる。そういう前衛的なあり方が九州派の原点だったわけで、単なる目立ちたがり屋の集団ではなかった。周囲に騒がれて調子に乗ったという一面はありましたが」

「ぼくとか、今度福岡県立美術館で回顧展のあった宮崎準之助さんなどは冷めているところがあって、九州派からいいものだけをもらったという感じがします。あの訳のわからないエネルギーは自分にはないものでしたから」

「世の中も美術界もだめになるだけだった」と言う。まだだめになっていないものを探すために漁村や山村へと尾花さんは足を向ける。「自分を貫きたいなら独りでやるしかない。田舎にいても怖いものは何もない」という言葉は、九州派を原点にした自分の歩みへの確かな自信から出た言葉だろう。